

ヘーゲル『大論理学』研究 2

伊 藤 一 美

Über Hegels „Wissenschaft der Logik“ 2

Kazumi ITOH

『大論理学』は存在 Sein から始まった。「ただある」という知から始まった。しかしそれは無との統一のなかにあるものであった。一定の規定性をもつものであった。こうして、存在は定在 Dasein であることになった。定在は、それ故或るもの Etwas である。或るものであるとは一定のしかじかのものであるということだから、そのものとしての限界 Grenze をもつ。制限をもつ。つまり他者をもつ。制限とはこえられないところで制限である。だがまた、越えるべき、越えようとして越えられ得ないというところで制限である。制限・他者を越えずして、否定せずして自己ではあり得ない。べきなくして制限もない。べき Sollen なくしては或るもの自身ではあり得ない。したがって定在とは制限（有限性）と当為（無限性）との統一体であり、両者をこえた真の無限性である。それは、他者をこえ出てゆきつつも自己自身へと還帰しているものである。こうもいえる。自己を否定しつつも自己にとどまるものである。ここで、定在はより具体的に規定されて向自存在 Fürsichsein となる。（以上第一編、1, 2 章）

3. 向自存在 Das Fürsichsein.

A 向自存在そのもの Fürsichsein als solches.

(1) 向自存在一般 Fürsichsein überhaupt.

向自的とは自己へと無限に向かっている、還帰しているということである。しかし、それが直接的・純粹にそうなのではなく、他在・制限をこえ出て、それを否定することを媒介として自己へと還帰している。「向自存在は、制限を、その他在をこえ出てしまっており、こうした否定としての自己への無限な還帰である

ということを、その本質としているのである⁽¹⁾。」

(2) 向自存在の契機 Die Momente des Fürsichsein

それ故に向自存在は「その自己自身への無限の関係という契機」をもっていることになる。しかもそれは、制限・他者をこえ出る、否定していくということによっての自己への無限な関係・還帰であるという、一つの揚棄する運動という契機である。しかし、制限や他者が消えてしまえば、自己への無限な関係も還帰もありえない。「向自存在は他者においてもつばら自己へのみの関係である⁽²⁾。」したがって向自存在は、他在を否定しつつも、否定した他在を自己の中にかかえている。他在は揚棄された他在としてある。これを向一的にある für eines zu sein という。「他在は向自存在のうちにのみあり、向自存在の自己自身への無限の関係の外にある何かではなく、だからして他者は向一的にあるというこの定在だけをもっている⁽³⁾。」この向一存在が向自存在の第二の契機である。

向自存在は、これら二契機を自己のうちに含んでいる。自己そのものでありつつ、自己への無限の還帰でありながら、「自己との単一な相等性⁽⁴⁾」でありながら、他在を揚棄しつつその揚棄した他在を含む。だからこれは実在的なものではない。他在があっても、真実においては他在が含まれていないからである。他在が向一的なもの、つまり第一の契機へと向かっているからである。ここでの向自存在は観念的なものにすぎない。「自己へと関係するというこの規定における向自存在は、他者が向自存在においては揚棄された他者にすぎないということによって観念性である⁽⁴⁾。」他者が他者となっていない。

しかし、観念性といえども、当然二契機をもつ。自己への無限な関係と向一存在という二契機である。精神や神や絶対者一般、モナドなどは自己への無限な関

係である。向一存在は空虚で内容が何一つない。想像にすぎず、現実的なものが何も対応していない。たんなる表象ということである。だが両契機は観念性の本質的な不可分な契機である。

(3) 一の成 Werden des Eins

したがって、向一存在は観念性であるが、両契機の単一な統一である。つまり、他在を揚棄する運動と自己自身への関係とは同一なのである。「揚棄する運動の自己自身への関係というただ一つの規定が現存しているのである⁽⁵⁾。」向一存在は自己関係にすぎないのであるから、それ故限界や規定をもたない自己内存在である。それは、自己自身との相等性でしかない。自己を自己へと関係づける運動である。自己へと関係する揚棄する運動である。純粋な否定作用である。ただし、否定すべき具体的なものがないから。しかも規定をもたないから、直接的なものでもある。これが向一存在である。「向一存在は純粋な否定作用であるこの直接的なものとして向一存在するもの、すなわち一である⁽⁶⁾。」

B Das Eins

(1) 一と空虚なもの

一は直接的なものであり、純粋な否定作用でもあった。否定すべき他者がいないのだが、否定作用を観念的にもつ。そこで、その作用は一の外に存在する他者として現われる。それは無である。空虚なものとしての無である。つまり、一は否定するものだが、他者をもたない。そこで、自己の外に否定すべきものを定立する。それが、一に対応する無である。こうなったとき、無・空虚なものは一の限界であり、一の他者へと関係する運動を成立させている。否、運動そのものである。こうして、一は空虚なものにかかわりあうことによって自己へと無限に関係するものとなる。これは、向一存在が一と空虚なものに規定されるにいたったということである。ここに向一存在は定在をふたたび得ている。観念性を脱脚したのである。

(2) 多くの一(反撥) Viele Eins (Repulsion)

向一存在は一と空虚を契機とする定在となった。これらの関係は否定の関係である。相互に否定し合う。すなわち、一は空虚なものに関係している。関心がある。というのは、一は空虚に関係してのみ自己であり、一でありうるからである。つまり、一は空虚を否定してのみ自己への関係であるのだからである。こうして、第一に、一は直接的なものとして他者である空虚なもの

へ否定的に関係している。自己をこえ出て空虚なものへと入っていく。だが、第二に、向一存在は観念性だからいかなる他者もない。自己自身への関係にすぎなかった。一以外にはない。だから、他者とは一そのものだということになる。こうして一の他者は一の非存在ということになる。前述の無、空虚なものとは一の非存在のことである。すなわち、一は自己の他者・一の非存在を自分自身でつくるのである。一の非存在だからそうする以外にない。「一は自己自身を自己からつきはなすのである⁽⁷⁾。」それは一の自己への否定的な関係である。これが反撥 Repulsion である。こうして多くの一が生じる。これが数多性 Vielheit である。だが、ここに生じた数多性は、実は他在ではない。一の自己自身への反撥から生じたものだから。このことで一は他者へと関係しておらず、自己へと関係しているだけだ。したがって他方こうもいえる。一は数多性に何んのかかわりもない、数多性は一に何らのかかわりがない、と。それは一にとって外的なことだ、と。これは論理的矛盾である。これを揚棄するには、一は多くの一のかなの一だとしなければならない。それを追求するのが、次の相互的反撥である。

(3) 相互的反撥 Gegenseitige Repulsion

一は自己自身を自己からつきはなし、多くの一を生成した。このつきはなすことが反撥であった。だから反撥とは一の自己自身への自己の反撥であった。自己への否定的関係であった。「一の自己を忘却する運動⁽⁸⁾」でもある。こうして、一によって多くの一が生成された。

しかし、一は自己へと関係している直接的なものである。他方、自己へと関係する否定でもある。だが他者はない、空虚なものである。しかし否定するのみの本性であるから、一は自己自身にかかわるしかない。こうして一は非存在としての自己に関係していくことになる。つまり、一は自己自身から非存在をつきはなす運動であることになる。一は自己自身から自己であって自己でないものをつきはなすのである。だから、つきはなされたものは、一であるか、同時に一の非存在、他の一である。したがって、反撥は多くの一を定立する運動である。

しかし、反撥において定立された非存在としての一が自己主張しなければ、一に対しなければ、非存在としての一自体でありつづけることが出来ない。だから、反撥は相互的反撥とならざるを得ない。実は反撥とは多くの一か相互に反撥しあう運動なのである。こうも

いいうる。一の反撥は他者としての一を自己からつきはなす運動であるからしてまた、多くの一が相互に反撥しあう運動でもある、と。「よりくわしく規定するならば、それぞれの一は反撥のなかで他者に対して自己を保持するのであるから、反撥は相互的な排除する運動である⁽⁸⁾。」

この相互的反撥・排除運動においておのおのの一は他によって反撥され、排除され、揚棄されて一である。つまり、多くの一は一を単に他者に対するものとして、一は多くの一との関係のなかで一である。一は向他存在、対他的でもある。こうすることで多くの一は自己を保持している。だから一は、その向他存在をつぶし合うことで相互に自己を保持していることにもなる。これが相互的反撥である。「相互的反撥は相互に揚棄する運動であり、おのおの一はそれがもろもろの他の一を向他存在として、非定在として定立することによってのみ、また同じくおのおの一が向他的に存在することを揚棄することによってのみ自己を保持する⁽⁹⁾。」このことは、反撥において多くの一が定立され、一は対他性、関係性、向他存在をもつにいたったということである。こうして一は、他者をもつにいたった。それは他の一である。この他の一を向一存在という。一は向他性を揚棄することで自己でありうるが、同時に向一存在をも揚棄せずしては自己ではない。「一は他者へと否定的に関係することによってのみそれだけで独立して自己を保持するが、しかもこの否定が相互的であるので一はそれのなかに含まれている向一存在を揚棄することによってである⁽¹⁰⁾。」多くの一は相互に否定・揚棄、つまり相互反撥をする。こうして相互に自己を定立する。相互反撥は相互定立である。この相互定立を牽引 *Attraktion* という。反撥は牽引である。「……反撥、すなわち一を自己からつきはなす運動は、もろもろの一をつきはなす運動へと、もろもろの他の一をただ向一的にのみ存在するものとして定立し、そしてそれとともに自己の向他存在を揚棄する運動へと、すなわち牽引へと移行してしまっている⁽¹¹⁾。」

C 牽引 *Attraktion*

(1) ひとつの一 *Ein Eins*

反撥は多くの一を生成し、それら多くの一を向他的に存在するものたらしめている。このことが同時に、他の一を一の契機、向一存在とした。多くの一は反撥する。しかし、それらは反撥のなかでもそれぞれ一である。ということは、多くの一は向他存在を否定し、向

一存在をも揚棄して、自己自身となっている。それは無限の自己自身への関係をもったものとなっていることであり、無限の自己関係である、ということである。こうなることが牽引であった。牽引において、自己自身への無限の関係が定立され、この関係が一それ自体である。

こうして、ここに二種類の一が出現している。① 第一の一は直接的な一である。これはたんに向他的にあるにすぎない。一としての自己自身を失なった一である。反撥の結果としての一である。他在としての一である。向他的であるにすぎない向自存在である。② 第二の一は、還帰する一である。これは向他存在を揚棄して自己へと還帰している。牽引する一である。このことの意味は、「一とは本質的に、直接的に存在するものではないということである。ということは、一はむしろ自己へと関係する否定であるから⁽¹¹⁾。」だから、この一は他在をも契機として自己自身のうちにもっている一であり、そういう向自存在である。

(2) 牽引と反撥との均衡 *Gleichgewicht der Attraction und Repulsion*

一は、まずはじめに反撥において自己を喪失して数多性(多くの一)となり、相互に外在化されたばらばらの一になった。しかし、多くの一は相互に反撥しあい、相互に他者を揚棄し合う。こうして多くの一は自己へと還帰する。と同時にこの一、自己へと還帰した一は、他在を自己のなかにもっている。他在を揚棄するとは、他在・数多性を消滅させることではない。外的他在を自己のものとするのが揚棄である。これが還帰した一である。それは「揚棄された他在としての自己への関係⁽¹²⁾」である。すなわち、自己へと還帰した一とは、多くの一との連続性・関連性のなかで、自己自身であるものである。このかぎりでは多くの一・数多性を揚棄している。一は反撥であり牽引である。また、一は媒介的なものである。数多性・他者を揚棄し、それを自己のうちにもっている。他者のある自己となっている。「したがって、それは……他者と他者への関係とをそれ自身のもとにもっている⁽¹³⁾。」これが、牽引としての一である。「ひとつの一は、それ自体が牽引であり、揚棄された反撥である⁽¹³⁾。」次のようにもいいうる。還帰・牽引によって、自己自身となった一が定立される。この一は排除・反撥をする。ひとつの一はこうすることで多くのものを保持する。これは、また牽引である。牽引と反撥とはこのようにしてただ均衡のうちにある。両者は同一である。「反撥と牽引とのこ

の同一性は、こうして一の自己自身への無限の関係がその向他存在であるという成果をもつ。一の向他存在はそれ自身の無限の否定であり、無限の自己外存在である。そしてこの自己外存在が、逆に無限の自己内還帰存在なのである⁽¹⁴⁾。」すなわち自立した一の多、多のなかで自立した一が定立されている。多くのもののそれぞれが一である。それぞれの一は多のひとつである。そういう一が定立されている。

反撥と牽引とは、もろもろの一の関係である。「現存しているのは、一が自己自身へと無限に関係しているものとして、その絶対的な他在へと関係しているところであり、また一がそのこの非存在へと関係していることによって、まさにこの点で一が自己自身へと関係しているということであり、また一そのものとはこの関係する運動にすぎないということである⁽¹⁵⁾。」

(3) 量への移行 Übergang zur Quantität

いまや、他者を揚棄し、しかもそれをかかえ、そして自己自身と関係している一が定立されている。「いまや現存しているのは、自己との統一のうちにあるが、しかし直接的ではなくて、その非存在へと関係しているもののなかで、しかしながらそれとともに自己自身へと関係している一である。その非存在を通じての一つの自己自身への無限の関係である⁽¹⁶⁾。」つまり、この一は自己の他者、非存在、すなわち他のもろもろの一と媒介的關係のなかで自己自身である一である。だから、この一は多くの同じ一のなかの一である。同質の一が多数定立されている。これは量 Quantität である。

第二編 大きさ (量) Größe (Quantität)

1. 量 Die Quantität

A 純粹量 Die reine Quantität

(1) 大きさは量であり、揚棄された向自存在である。しかし、いまだ規定されていない量であるから純粹量である。

向自存在は一であったが、それはまず他者に対して否定的にふるまう反撥する一であった。しかし、その一は他者との関係のなかにあるということになり、反撥する一は他者を否定しつつも、その他者をかかえる自己自身である一となった。これは向自存在が牽引する一になったことである。このように牽引と反撥とは統一され、それらは一の契機となった。「一は牽引に

よって自己自身へと関係しており、また同時に反撥によって他者としての自己に関係している⁽¹⁷⁾。」一は多くの一のなかの一となった。自己自身に関係している同質なる一の数多性が定立をされた。かくして、量とは数多くの同質なる一からなる。このような量のあり方を連続性 Kontinuität という。このことは牽引が連続性の契機となっていることを意味する。だから、連続性とは第一に「自己への単一な自己自身に等しい関係⁽¹⁸⁾」である。同時に第二に、もろもろの一の統一である。したがって、連続性は数多性を含む。数多性でもある。だが、連続性のなかでの数多性であるから区別や中断のないものである。だから、「連続性とは相互外在的存在の自己相等性」という契機であるということになる。

(2) 大きさは数多性でもある。連続性は自己相等なるものの多である。それ故、大きさは連続性のなかに離散性という契機をもっていることになる。だが、排除することはない。離散性とは合流する離散性である。

(3) こうして大きさは連続性と離散性という二契機をもち、これらの統一であるということになる。これが量である。量は一つの大きさ、まとまりである。だが数多性でもある。

B 連続的な大きさと離散的な大きさ Kontinuierliche und discrete Größe

(1) 連続性と離散性が量の二契機である。両者の直接的統一が量である。そして量は、まず、同質なるもののつらなり、連続性である。連続的な大きさである。つまり、連続性は量の一契機にすぎず、離散性と一つになって完全なものとなる。しかし、連続性は量の全体である。まとまりをつくる。こうして、直接的な量は、むしろ大きさであり、連続的な大きさである。

(2) 「直接的な量は連続的な大きさである。だが量は一般に直接的なものではない⁽¹⁹⁾。」というのは、連続的な大きさというのは規定された一の多だからである。媒介的に定立された一の全体だからである。量に内在的な規定態は一である。だから直接的な量であるにもかかわらず連続的な大きさは規定されたものなのである。規定された一の多だからである。量は一において真に規定されたものとなっている。量の真の規定態は一である。かくして、量は離散的な大きさとしてあることになる。つまり量は「一のまず第一に無規定的な数多性」eine zunächst unbestimmte Vielheit von Eins⁽²⁰⁾ である。一の多なのである。すなわち、量は互

いにばらばらな、外的でしかない一から出来ているものだ。「量は相互外在的存在 *Außereinandersein* である⁽²⁰⁾」連続的な大きさは、自己自身に還帰した相等的な、しかも相互に外的でしかない一から出来ているつらなり、集まりである。「離散的な大きさは連続的でなく、中断されたものとしてのこの相互外在である⁽²⁰⁾。」つまり、量は自己還帰した相等な一のばらばらだ、ということだ。こうして量とはばらばらな一の集まりだとなる。しかし連続性とは、ばらばらな一が相等であること、「換言すれば、もろもろの一が同一の単位をもつということにある⁽²⁰⁾」したがって、離散的な大きさは単位が多・同一の単位の多数の集まり、ということになる。

C 量の限定 *Begrenzung der Quantität*

離散的な大きさは、第一に一を原理としている。しかし、第二に本質的に切られていない。単位 *Einheit* としての一である。つまり連続性をもつ。だから、この大きさは「いわば幅のある、連続的な一である⁽²¹⁾。」ここでは一が単位 *Einheit* において揚棄されている。一が多くの一として *Einheit* へとまとめあげられている。だから連続的な量が定立されている。しかし、連続的な量は離散的な大きさへと移行している。連続性は一において揚棄されている。多くの一はまとめられている。だから一は *Einheit* の一となっている。つまり *Einheit* は一を否定して定立されている。と、ともに一を生かしている。*Einheit* のもとで一は限界となっている。「この限界は単位 *Einheit* へと関係づけられており、単位 *Einheit* のもとでの否定であるということのほか、自己へも関係づけられている。限界はそれが本来あるがままのものとして、囲いこみ、包みこむ限界である⁽²¹⁾。」他方、限界づけられているもの(存在)は連続性である。同質なものである。同質だからその点で限界が出来ない。「連続性は限界とこの一とをこえてゆく。したがって、真に離散的な量(大きさ)はひとつの量、あるいは定量である⁽²²⁾。」

こうして、大きさは連続性と離散性との統一である。それは同質な多くの一のまとまりである。「量としての大きさは、これら両契機の自己へと還帰した統一である⁽²³⁾。」だから量とは両契機の否定的統一である。連続性は離散性へと否定され、揚棄されている。離散性は連続性なしにはそれでない。連続性と離散性が同一となっている。それ故、両契機の否定的統一としての大きさは、連続的な大きさにおいては消失してしまっ

た区別、可能性にすぎない区別をもっている。

したがって、第一にこの否定的統一は連続的な大きさと離散的な大きさととの統一である。両者の区別はない。第二に、この否定的統一は大きさがそれ自身のもとにもっている規定態である。「すなわちそれは一であり、この一のなかで量がその固有の規定態としての自己に対して自己を定立するものである⁽²³⁾。」ここに定立されたものが定量である。

2. 定量 *Quantum*

A 数 *Die Zahl*

いかなる量も限界をもっている。だから量とは定量である。それは連続的な大きさでもあれば、離散的な大きさでもある。それ故、限界とは連続性の限界と数多性のもとでの否定としてある。前者は連続的な大きさのもとでの限界で、後者は離散的な大きさのもとでの限界である。つまり、量は連続性と離散性との否定的統一である。そのなかでは区別が揚棄されている。量は区別から区別されている自己内存在である。この点では、量は限界に対して無関心である。しかし、量は固有の契機としての一を限界として自己自身のなかにもつ。この点では限界に無関心ではない。この一が定量の原理である。この一は第一に連続的であり、単位 *Einheit* である。第二に、それは離散的であり、数多性である。第三に、この一は連続性と離散性との否定である。この両者が一の契機である。このかぎりは一は自己を否定している。この否定は非存在を自己から排除する運動でもある。こうして、一は自己へと関係し、囲いこみ、他者を排除する限界である。「この限界づける運動において、……全体が一般に離散性という形式のうちにあるというその限りで、連続性は多くの一の統一として現存している⁽²⁴⁾。」しかし、この統一は一が原理であり、多くのものがすべてそれぞれ一であるから一である。だから一は連続性の限界である。他方、離散的な多くのものは、もろもろの多くのものであり、限界づけることは出来ない。それらは相互に等しい多くのものである。無規定的なものである。したがって定量は離散的な大きさとして現われる。しかし、連続性と離散性という両契機はそれらの統一としての定量のうちにある。連続性は統一としてあり、また多くの一としてもある。離散性は数多性を統一するという規定された区別としてある。すなわち、離散性は一定の限界のなかでの区別としてある。というのは、多くのものはそれぞれが一であり、それらは同一の単位を

もっているからだ。「多は囲いこむ一そのものの連続性ならびに離散性をなしている。というのは、多はそれ自身が連続的かつ離散的であるからである⁽²⁵⁾」このように多とは規定された定量である。それは数である。

数は第一に、一を原理としている。その限り一は連続的な一、単位である。この単位は多くの一としてある。しかし、単位は一であるから多くの一を一としてしまう。ここに定量が定立される。多くのものは否定され、限界づけられる。「数多性は限界づける一の契機であり、限界によって分けへだてられ、かつ囲みこまれている多くのものはそれらの限界の外にあるのではない。限界は一そのものであり、そしてこの一は量であり、また多くのものがそれであるところの離散的なもの、または連続的なものそのものである⁽²⁶⁾。」この多くのものが数の集合数である。

集合数は単位としての一ではないが、諸単位の集合数である。しかし、集合数は数多性ではない。集合数は規定された定量である。2, 10, 100 等といったものだ。「したがって、数は単位と集合数とをその契機としており、それ自身がこれら両者の統一である。単位は連続性の契機をなし、集合数は離散性の契機をなす⁽²⁷⁾。」

B 外延的定量と内包的定量 Extensives und intensives Quantum

1. 両者の区別 Unterschied derselben

(1) 定量は集合数でもある。それ故、離散的なものでもあり、多であるが限界づけられている多である。したがって定量は複多的なもの Vielfaches である。数多性といっても定量の限界のなかでのそれであり、定量の限界と一体となっている。こうした定量は外延的な大きさである。つまり一定の限界まで拡がった大きさである。外延的な大きさは連続的な大きさとはちがう。連続的な大きさは量が同質の一のつらなりだ、ということであり、牽引をうけついだ。これに対応するものは、同じく量にかかわる概念で離散的な大きさであり反撥をうけついだ。これらはそれぞれ量にかかわる概念で、規定、限界をもたない。定量はこれらの否定的統一によって定立された。つまり限界づけること、規定を与えることで定立された。

すなわち、連続的な大きさも離散的な大きさも定量の契機である。そこで定量は限界づけられた多、数である。そしてこの数はまずさしあたり外延的定量としてある。それは同一の単位の集合数である。

(2) したがって、外延的定量は区別された他者を自己自身のもとにもっている。というのは外延的定量はそれ自身複多的な限界だからである。外延的定量はその限界のなかで複多的なものである。それ故、外延的定量は数であるが、その数は本来的に規定された定量である。数による規定は或るものの大きさを示す。それ故、他の大きさからの区別を必要としない。だから数による規定は他者に無関心である。それは自己へのみ関係づけられた限界である。だが、限界の多はそのなかでは不等ではなく、相等である。つまり連続的なものである。したがって、この多は連続性をもち単一の統一となる。つまり、集合数は単位の集合となる。こうして数は単位と集合数とが統一されたものであることになる。

定量は単位という内包をもつものとなった。単一は規定態となった。この意味で定量は、内包的な大きさである。外延的な大きさが、内包的な大きさへと移行した。定量は単位としての無規定な集合ではなく、一という単位の多重性となった。これが度 Grad である。10 度とか 20 度というのがそれである。度は集合数とか統計とかではない。それらは外延的なものだ。「度とは 10 番目の度、20 番目の度というひとつのものにすぎない⁽²⁸⁾。」

2. 外延的な大きさと内包的な大きさと同一性 Identität der extensiven und intensiven Größe

定量は外延的な大きさとしては集合数であった。しかし、それは単位のそれであった。数は単位と集合数との合一であった。こうして外延的な大きさは単一態へと、単一の規定態へととなった。これが内包的な大きさであった。その原理は「規定された一」である。定量は度となった。内包的な大きさは集合数でもあるから、度も集合数を契機としてもつ。それは多重的なものの単一である。つまり一と多重性の同一性のうちにある。例えば「外延的な大きさとしての 20 は、離散的な一としての 20 箇の一を自己のうちに含んでいる⁽²⁹⁾」が、20 と規定された度は 20 箇の一を連続性として含んでいる。この度は 20 番目の度であり、20 という集合数としてある。しかし「それは数的一の集合としてのみ集合数である⁽²⁹⁾」

だから、内包的な大きさの規定態(度)は二重の側面から考察される。① この規定態(度)は、他の諸々の内包的定量との関係において規定されている。それは他の度から自己を排除するが、この排除運動のうちで自己でありうる。20 番目は 19 番目、21 番目から区別

されている。この区別において自己だ。② しかし、それはそれ自身のもとで規定されてもいる。20番目の度は20を本来的に含んでいる。その点では他に無関心でもある。つまり、そういう集合数だ。ここから、度は外延的定量だといえる。

したがって、外延的な大きさと内包的な大きさとは、定量の同一の規定態である。それらは定量を規定する二つの契機で、しかも同一性をもつ。後者は単一な規定態のうちにある定量である。前者は複多的な規定態のうちにある定量である。しかも、すでにみたように、外延的な大きさは内包的な大きさへと移行する。つまり、外延的な大きさは多であるが、その多が自己に外的な数的一の規定態となり、単一な規定態となったからである。

こうして、内包的な大きさは、本質的に外延的な大きさである。この両者の区別は、集合数と単位という定量の契機による。

3. 定量の変化 Veränderung des Quantums

定量は単位と集合数とを契機としている。前者は内包的なものを、後者は外延的なものをつくらしている規定である。しかし、外延的定量は自己へと関係する一として内包的定量へと移行している。この内包的定量は自己内で単一である。自己自身への関係である。だが、まさにそれは自己自身へと関係するという点において「自己にとって外的であり、自己内ではなく他の多重的なもののうちに成りたっている⁽³⁰⁾」というものである。したがって、内包的定量は向自存在的定量であり、しかもこの点で他者へと関係づけられている。他者とは他の定量である。それ故、定量は他在との連続性のうちにある。だから、それはそれぞれの大きさの規定態をこえ出ること出来るし、変化させられる。さらに、それは変化せざるを得ない。定量は在る限界ではなく、成る限界である。

では、その「成る」とはどういうことか。一は無限的である。つまり自己へと関係する否定である。だから一は自己自身からの自己の反撥である。定量は単位としての一を契機としてもっているから、同様に無限的であり自己自身から自己を反撥する。しかも、定量は規定態であるから、規定態の自己自身からの反撥である。だから、この反撥はその定量の他在を産出する運動である。他者に成るということは定量の概念でもある。もちろんこの他者自身が定量である。しかし、この定量はふたたび揚棄される。「この外へ出る運動の内」にふたたび生成した限界は、したがって端的にふた

たび揚棄される限界にすぎず、こうして無限に進むのである⁽³¹⁾。」

C 量的無限性 Quantitative Unendlichkeit

1. その概念 Begriff derselben

定量は変化して他の定量になる。さらにそれはそれの他在(者)へとなる。この他者もまたひとつの定量である。しかもこの他者とは定量そのものの他者でもある。というのは、定量は他者に無関心なものであるからである。定量は無関心的な規定態である。だが、しかし、実は、この規定態は他者における規定態にすぎない。つまり、他者との関係においてあるものなのである。「他者への関係は定量にとって外的であるが、定量はそれ自身が自分のこの外面性である⁽³²⁾。」定量はそれの他者、すなわち外面性なくしては定量たりえないのである。定量は他者に無関心であるが、他者なくしては存在しえないという自己矛盾をもつものである。すなわち、定量は本来的に自己自身が他者なのである。それは他者において規定されてある。「定量は自己自身に対して他者であり、外的なものなのである⁽³³⁾。」しかし、定量は他者に対して無関心で自己自身でしかない。定量は自己矛盾そのものである。この自己矛盾を解消するのは定量自身である。定量は他者を、「他者において規定されて在る」ことをこえ出てゆくべきものなのである。けだし、定量が自己自身であるためには。それ故「定量はひとつの当為である⁽³⁴⁾。」こうして、定量は他者を揚棄して自己自身へと還帰する。この時定量も自己揚棄している。しかしこの新たな定量も、定量であるから自己であり、他者であるという自己矛盾をもつ。そのため揚棄のくりかえしがなされる。無限的くりかえしがなされる。これが「当為」である。ここに量的無限性が定立される。質的無限性においては有限なものと無限なものとの相互関係は、それらの概念のうちだけにあった。両者の統一は根底にある内的関係にもとづいていた。しかし、量的無限性においては有限なものは、それ自身のもとでその無限なもの(他者のこと)へと関係している。だから両者の関係は無限進行である⁽³⁵⁾。

2. 無限進行 Der unendliche Progreß

無限進行は定量というものが持っている矛盾の表現である。定量は他者に対して無関心な規定態、つまり自己自身への関係でしかないものなのだが、その他者が自己の外的なものとしてある。定量は他者があって

自己となっている。この矛盾とその揚棄との表現が無
限進行である。しかし、それは矛盾の解消とならない。
というのは、矛盾したもののそれ自体が定量概念だから
である。すなわち、「定量とは、その彼岸をもつこと
が、その概念のうちに存在するという、そういった
ものである⁽³⁵⁾。」そして、この彼岸とは ① 定量の非
存在である。つまり定量と区別された、切られた他者、
他者としての定量である。だが ② 定量はこの彼岸と
の連続性のうちにある。「というのは、定量はそれ自身
の他者であり、自己自身に外的であることをその本質
としているからである⁽³⁶⁾。」そして、この彼岸、つまり
無限なもの、あるいは他者それ自身もひとつの定量で
ある。こうして、彼岸はその逃亡からよびもどされ此
岸となる。ひとつの定量となる。ここにふたたび新し
い限界が定立される。この定量も定量なるが故に、再
び自己自身から逃亡し、自己をこえ出る。これは、無
限につづく。だから、この無限性は悪無限性である。前
進ではない。定立と揚棄、再定立と再揚棄のくり返し
でしかない。それは「揚棄されたものがその揚棄す
る運動そのものを通じて連続的なものとして否定的な
ものへとまいもどってくるという否定的なものの無力
である⁽³⁷⁾。」

3. 定量の無限性 Unendlichekeit des Quantums

(1) 定量の無限進行は無限量、または無限小とな
る。こうなるのも定量は本来的に規定されたものであ
るが、この規定態を自己の外にもつからだ。すなわち、
定量は他者を排除することで自己であるのだが、その
他者との関係において自己でありうる。排除したものと
関連し、それが自己の外面性となっている。この排
除と関連との矛盾を解消するため、あるいは外面性と
無関心性とを解消するために定量は自己を揚棄する。
こうして定量はそれの自己外在において自己へと還帰
する。こうして外在、外面性は揚棄され、新しい定量
が定立される。しかし、これも定量だから同じことを
なす。自己外在とそれの揚棄、そして自己還帰とがくり
かえされる。これは、無限進行のうちに定立されて
いる円環である。だが、この円環のうちに定量の概念
が存在している。それは、定量を揚棄する運動が同じ
く定量の彼岸を揚棄する運動、つまり彼岸を此岸とす
る運動である、ということである。定量の否定と、こ
の否定の否定とが定立されている。

したがって、無限進行の真理態は定量とその彼岸と
が定立されるが、揚棄されたものとして定立されてい
るということである。彼岸も此岸となっている。つま

り、無限進行の真理態は、定量とその彼岸との統一で
あり、両者は契機として存在しているということであ
る。

(2) 定量とその彼岸との統一がつくりだされた。
これは彼岸を此岸化することである。彼岸を揚棄し、新
たな定量とすることである。その運動はこうなる。①
定量は他者に無関心な限界(もの)としてある。他者
を排除し、自己へと関係するものとして規定されてい
る。ここで他者、つまり定量の外面性は消えている。定
量の外面性は、この存在の外へとあゆみ出ている。②
しかし実は、定量は他者を排除し自己となることで、自
己の外面性と関係しているのである。むしろ、この外
面性が定量を自己たらしめ、定量そのものとして規定
しているといえる。「定量の本来的に規定された存在の
本性は、この外面性を本質としている⁽³⁸⁾。」といえる。
③ すると定量は自己を他者においてもっていること
になる。そこで自己をこえ出ていかざるをえない。
「……定量は無関心的な限界である限りでは自己をこ
え出る⁽³⁹⁾。」④ こうして定量は無関心性を、つまり他
者を排除し自己であることを揚棄し、自己の外面性で
あるものを定量として定立する。「……定量の自己をこ
え出る運動は、その規定態である外面的なものに対
するその無関心性を揚棄する運動であり、それととも
にこの規定態を自己自身として定立する⁽³⁹⁾。」定量
は彼岸と自己とを合一し、自己を本来的に規定された
ものたらしめる。彼岸と自己とが、この無限進行の両
契機であるが、それぞれが一方の反対のものである。無
限進行とは定立された矛盾 *der gesetzte
Widerspruch*⁽⁴⁰⁾ である。

定量は第一に自己をこえ出る。① 定量は自己を揚
棄し、その彼岸を定立する。② それとともに無限な
もの(無限性)を定立する。第二に、この無限なもの
がふたたび規定(限定)され、新しい限界が定立され
る。だから ① 定量の即自存在が揚棄され、ふたたび
無関心な定量が成立する。② 定量の否定、つまり定量
の彼岸が揚棄され、したがって定量が自己をこえ出る
運動は定量自身のなかへ取りもどされる⁽⁴⁰⁾。こうし
て、定量の無関心性(他者排除・自己性)と外面性(他
者)とは消失している。したがって、限界は揚棄され、
定量へと還帰し、定量は限界を自分のなかにもつ。限
界は定量がふたたび質的になっている、ということだ
である。こうして定量は量的規定と質的規定とをもつに
至った。そういう定量は量的相関・比である。

3 量的相関 Das quantitative Verhältnis

A 直接の相関 Das directe Verhältnis

(1) 比において定量は彼岸へと関係づけられる。この彼岸は他の定量である。比とは二つの定量の相関である。それは定量をそれ自身のもとで区別することである。単位と集合数とに区別することである。定量の契機が、それが契機でありながら同時に固有の定量として現われるのが比である。こうして、比とは二つの定量の間でつくられるものであり、二つの定量のただひとつの規定態、あるいは限界である。

(2) この規定態・限界が指数である。指数もひとつの定量である。指数は比を構成する定量とその彼岸とをそれ(指数)自身のもとにもっている。指数は定量の質的规定態・定量そのもののもとでのその固有の区別である。つまり、指数は単位と集合数とへの定量の区別の結果、区別そのものなのである。だから、比とは質的规定態(指数)と量的規定態(=定量)との統一だといえる。

(3) 比の両項は指数というただひとつの定量をつくる。この指数は両項の否定態である。両項の相関とは両項の否定なのである。つまり、比において両項は相互に質的に関係しあう。質は本質的に否定であるから。相関において一方項は非存在、否定され消えていくものとしてある。だが他方項も自己を貫きつつも指数において否定される。だから比はそれらの項を揚棄する運動である。こうして指数(単一な規定態)は、直接的な、存在的な定量でもあれば、同時に非存在的な定量でもある。また規定された定量でもある。

B 逆の相関 Das umgekehrte Verhältnis

(1) いまや比とは、指数が定立された存在でもあれば、同時に非存在としてあるようになったものだ、ということになった。つまり同一の定量が存在的なものとして、また非存在的なものとして定立されているということである。こうしたことは反比においてみられるものである。反比においては大きさの一方は否定的に他方の大きさへと連続している。つまり一方の大きさは、その大きさを他方の大きさのなかで廃棄する。「一方の定量がそれ自身としてある限り、それは他方の定量の否定である⁽⁴¹⁾。」一方の定量は他方の定量を非存在化する。反比においては二つの定量は否定的に関係する。しかも、この否定的な関係において一方の定量は自己自身のもとで他方の定量であり、同時に他方

の定量の非存在としてある。こういう仕方では、一方の定量は他方の定量を自己に対立させてもっている。こうして一方の定量が変化すれば、この変化は次のような結果をもたらす。① 一方項の変化はその定量そのものの変化であり、同時にそれの他方項・非存在の変化である。② しかし、このことによって一方の定量の存在になるもの(増大)は、他方の定量の非存在(減少)である。

(2) 「したがって、反比における定量は、それがその規定態をそれが関係づけられている相手のうちにもつ、という仕方では自己をこえ出る。定量はその規定態をその非存在としての相手のうちにもつ⁽⁴²⁾。」ここに反比の相関がつくられる。この全体がここでの指数である。

(3) 指数、あるいは全体は直接的定量としてある。それだけではなく、それ自身のもとで区別された存在である。つまり、さしあたりは二つの項に区別された存在である。二項のそれぞれはその項自身であり、その否定としての他の項をそれのもとにもっている。このことによって、全体は二重の仕方では定立されている。① それは両項の統計である。② しかし、この全体は否定的なものとしてある。また非存在でもある。「おのおのの項の非存在が他方の項なのである。こうして両項が、またこのことによって全体が非存在として定立されている⁽⁴³⁾。」③ だからして、反比では存在と非存在とは同一である。「というのは両項のおのおのが、それが他方の項の否定である限りで定在をもっているのであるから⁽⁴³⁾。」つまり、他方の項からの消失が、一方の項への加算である。したがって、おのおのの項の非存在が他方の項の存在なのである。「こうして揚棄された存在が相互関係態のなかでは揚棄されているものの定在である⁽⁴³⁾。」したがって、反比の指数はその比の非存在として、他者としてあることである。この他在が反比の指数なのである。ここで、定量はそれの他在と連続している。また、指数は否定である。この否定において定量が自己を維持してもいる。こうして「反比は、定量はそれの他者がその非存在であるということのうちで、その他者へと関係すべきであるということにおいて成りたっている⁽⁴⁴⁾。」かくして、反比はそれの他在を揚棄してしまっているような当為である。反比は彼岸が同時に消失してしまっておりながら此岸との統一へと還帰している無限性である。「定量は、このようにしてその他在へと連続していることによって、それとそれの他在との統一であ

る⁽⁴⁵⁾。」このようなものは「べき相関」Potenzenverhältnisである。

(つづく)

C べき相関 Potenzenverhältnis

(1) べき相関は、正比がもっていた外面性と反比がもっていた非存在とを揚棄しているものである。ということは、べき相関では単位はそれ自身集合数であり、そしてこの単位自身の集合数がべき相関だからである。だから、べき相関とは単位の他在、単位の集合数が単位それ自身である。「……べきは、その集合に属するおのおののものがその集合そのものであるような一つの集合である⁽⁴⁶⁾。」単位となる集合数の自己自身の集合数がべきである。こうして、べき相関では正比の外面性や反比の非存在は消失している。さらにいえば、べき相関では他在・集合数が最初の定量(単位)によって規定されている。他在・集合数が、単位自身のもとにある。だから、定量はべきにおいて自己自身に還帰している。「それは直接にそれ自身であり、またその他在である⁽⁴⁶⁾。」こうもいえる。定量のその他在における自己自身との同一性が存在している、と。それ故、ここには他在とか限界とか否定とかがまったくない。否、それらは揚棄されたものとしてある。だからそういうかたちで定在はその他在へと連続している。

(2) この相関は、定量という概念をよりよく表わしている。というのは、定量とは他のものから自己を区別するのだが、とのことをよく満たしている。つまり、定量は無関心なものなのだが、すなわちその他在において自己と連続している、あるいは自己となっているものなのだが、そのことをよく表わしている。けだし、べき相関においては定量の他在がその定量自身であるからである。こうして、この相関において、定量は質になってしまっている。つまり、量とは外面性、無関心性、あるいは他在をぬきにしては語れないものなのだが、いまその他在、外面性、無関心性が揚棄されてしまっているからである。

はじめに量は質に対立して現われた。質の真理態が量であった。だがいまや量はそれ自身がひとつの質ということになった。量の真理態は質である。すなわち、量である質、質である量が、いまや真理態として出現したのである。これが度量 Maß である。「定量はいまや無関心的な、ないしは外的な規定だけでなく、或るものがよってもってそれであるところのゆえんのものである⁽⁴⁷⁾。」定量の真理態は度量である。

注

- (1) ヘーゲル『大論理学』第1版寺沢訳(以文社)160頁。Hegel; „Wissenschaft der Logik“ (Erstausgabe, Wieland 版) S. 92. (以下引用は両書より)
- (2) 161 頁, S. 93.
- (3) 161 頁, S. 94.
- (4) 163 頁, S. 95.
- (5) 167 頁, S. 99.
- (6) 168 頁, S. 100.
- (7) 172 頁, S. 105.
- (8) 175 頁, S. 109.
- (9) 177 頁, S. 111.
- (10) 178 頁, S. 111.
- (11) 180 頁, S. 114.
- (12) 181 頁, S. 115.
- (13) 182 頁, S. 116.
- (14) 184 頁, S. 118.
- (15) 185 頁, S. 119.
- (16) 194 頁, S. 129.
- (17) 199 頁, S. 134.
- (18) 200 頁, S. 135.
- (19) 215 頁, S. 151.
- (20) 216 頁, S. 152.
- (21) 218 頁, S. 154.
- (22) 219 頁, S. 154.
- (23) 219 頁, S. 155.
- (24) 221 頁, S. 158.
- (25) 223 頁, S. 159.
- (26) 223 頁, S. 160.
- (27) 224 頁, S. 160.
- (28) 233 頁, S. 171.
- (29) 236 頁, S. 174.
- (30) 240 頁, S. 179.
- (31) 242 頁, S. 181.
- (32) 242 頁, S. 182.
- (33) 243 頁, S. 183.
- (34) 243 頁, S. 182.
- (35) 244 頁, S. 184.
- (36) 244 頁, S. 185.
- (37) 246 頁, S. 186.
- (38) 261 頁, S. 203.
- (39) 261 頁, S. 204.

- (40) 262 頁, S. 204.
- (41) 304 頁, S. 253.
- (42) 305 頁, S. 254.
- (43) 307 頁, S. 256.

- (44) 307 頁, S. 257.
- (45) 308 頁, S. 257.
- (46) 309 頁, S. 259.
- (47) 311 頁, S. 261.